皮　膚　科

1．臨床医学教育の現状と評価

（1）臨床医学教育の目標

1）皮疹の記述が正確にできること

2）肉眼所見にもとづいて診断を下し、生検が必要か否か判断できること

3）適切な外用剤の選択ができること

4）簡単な手術が独立してできること

（2）医員、医員（研修医）の現状と研修実績

1）初期研修医の現状について

a．研修実績について（対象期間：平成９年度－12年度）

入局者数と本院での研修期間（月数：平均値）

年　　度	９年度	10年度	11年度	12年度
入局者数	１人	１人	５人	１人
研修期間	15ヶ月	12ヶ月	13ヶ月	12ヶ月

b．ローテート方式研修の実績

平成９年度：１人、研修した他科名：形成外科

平成10年度：０人

平成11年度：３人、研修した他科名：第一内科、形成外科、救急科

平成12年度：０人

2）医員の受入れ状況（対象期間：平成９年度－12年度）

年　　度	９年度	10年度	11年度	12年度
採用者数	３人	２人	０人	２人

（3）指導体制について

病棟では指導医とペアで診療にあたる。外来では教授、助教授の診療に際し、カルテを書き、処置、生検を上級医の指導のもとに行う。病理組織診断方法を教授から指導を受ける。

（4）研修の評価について

カンファレンスでの発表、外来、病棟での毎日の診療を上級医が評価する。１（1）に従って。

（5）関連研修施設の現状

1）大分県立病院　2）国立別府病院　3）健和会大手町病院　4）兵庫こども病院

（6）臨床教授

岡本　壽男（大分県立病院　皮膚科部長）

（7）認定医・専門医・指導医の取得状況（平成９年度－12年度）

1）９年　皮膚科学会認定医　０名、形成外科学会認定医　１名

2）10年　皮膚科学会認定医　３名、形成外科学会認定医　１名

3）11年　皮膚科学会認定医　１名、形成外科学会認定医　１名

4）12年　皮膚科学会認定医　2名

（8）学会認定施設の状況

1）日本皮膚科学会認定施設

2）日本形成外科学会認定施設

※今後の課題と改善策

・皮膚科医が手術に携わる機会を増す。

・形成外科本来の幅広い疾患の症例が大学病院で診察できるようPRが必要。

2．臨床医学研究の現状と評価

（1）臨床医学研究の目標

1）日常の診療に際して、文献のデータに基づき科学的に方針が立てられること。

2）一度は自分しか持っていないデータを得，それを発表すること。

（2）研究スタッフ

教授　1名、助教授　0名、講師　1名、助手　8名

実験助手（非常勤職員を含む）　2名

事務職員（非常勤職員を含む）　1名

（3）研究領域と研究課題（対象期間：平成9年度－12年度）

主な研究課題名

1）毛成長とアンドロゲン

2）水疱性疾患の発症機序；エピプラキンの構造と機能

3）細胞外マトリックスとサイトカインの相互作用

4）アトピー性皮膚炎と末梢血単核球のサイトカイン

（4）博士（医学）の学位の取得状況（平成9年度—12年度）

年　　度	9年度	10年度	11年度	12年度
取得者数	0名	1名	0名	2名

（5）学会、研究会活動（シンポジウム、特別講演、学会役職等）

シンポジウム司会等多数

年　　度		9年度	10年度	11年度	12年度
学会発表	(国際)	3回	5回	2回	3回
	(国内)	20回	20回	33回	33回
	(地方)	30回	28回	31回	22回
	(司会・座長)	10回	10回	10回	10回
シンポジウム特別講演等					
	(国際)	0回	1回	0回	2回
	(国内)	2回	2回	5回	0回
	(地方)	0回	0回	0回	0回
	(司会・座長)	0回	1回	0回	0回

学会役職（評議員、理事等）	（平成9年度－平成12年度）
日本皮膚科学会	高安　進（評議員）
日本皮膚悪性腫瘍学会	高安　進（評議員）
日本内分泌学会	高安　進（代議員）
日本アンドロロジー学会	高安　進（評議員）
日本乾癬学会	高安　進（評議員）
日本研究皮膚科学会	高安　進（理事） 藤原作平（評議員）
日本結合織学会	藤原作平（理事）

（6）研究論文（英文、和文）（平成9年度－12年度）

1）Fujiwara S., Kohno K., Iwamatu A., Naito I., Shinkai H.: A 450-kDa human epidermal autoantigen. Connect. Tissue, 29：33～38, 1997

2）Tadokoro T., Itami S., Hosokawa K., Terashi H., Takayasu S.: Human genital melanocytes as androgen target cells. J. Invest. Dermatol., 109：513～517, 1997

3）Terashi H., Kurata S., Tadokoro T., Ishii Y., Sato H., Kudo Y., Katagiri K., Itami S., Takayasu S.:Perineural and neural involvement in skin cancers. Dermatol. Surg., 259～265, 1997

4）Katagiri K., Itami S., Hatano Y., Takayasu S.: Increased levels of IL-13 mRNA, but not IL-4 mRNA, are found in vivo in peripheral blood mononuclear cells (PBMC) of patients with atopic dermatitis (AD). Clin. Exp. Immunol., 108：289～294, 1997

5）Sato T., Sonoda T., Itami S., Takayasu S.: Predominance of type Ⅰ 5α-reductase in apocrine sweat glands of patients with excessive or abnormal odour derived from apocrine sweat (osmidrosis). Br. J. Dermatol., 139：806～810, 1998

6）Hatano Y., Katagiri K., Takayasu S.: Heterogeneity in expression of cytokine mRNA in freshly isolated peripheral blood eosinophils of patients with cutaneous disease associated eosinophilia. Intern. Arch. Allergy Immunol., 120：86～90, 1999

7）Hatano Y., Katagiri K., Takayasu S.: Increased levels in vivo of mRNAs for IL-8 and macrophage inflammatory protein-1α (MIP-α), but not of RANTES mRNA in peripheral blood mononuclear cells of patients with atopic dermatitis (AD). Clin. Exp. Immunol.,

117：237～243, 1999

8）Okamoto O., Fujiwara S., Abe M., Sato Y.: Dermatopontin interacts with transforming growth facter β and enhances its biological activity. Biochem. J., 337：537～541, 1999

9）Sonoda T., Asada Y., Kurata S., Takayasu S., The mRNA for protease nexin-1 is expressed in human dermal papilla cells and its level is affected by androgen. J. Invest. Dermatol., 113：308～313, 1999.

10）Terashi H., Izumi K., Rhodes L. M., Marcelo C. L.: Human stratified squamous epithelia differ in cellular fatty acid composition. J. Dermatol. Sci., 24：14～24, 2000

（7）高度先進医療開発研究の現状

“難治性潰瘍治療を目的とした医用材料の開発”というテーマでDNAチップを作成中である。

※今後の課題と改善策

・臨床症例から基礎医学に通じる問題点を見出し、そこからまた臨床応用へ戻るという長い視野に立った研究を行う。

3．診療の現状と評価

（1）診療の目標

1）難治性皮膚疾患をコントロールし、QOLを高める。

2）皮膚悪性腫瘍の予後の改善を図る。

3）高度な形成外科技術により機能回復と審美性の向上を目指す。

（2）診療実績（平成９年度－12年度）

区　　分	平成９年度	平成10年度	平成11年度	平成12年度
外来患者数	13,142人	13,276人	13,523人	14,472人
初診患者数	1,237人	1,249人	1,274人	1,359人
紹介患者数	360人	359人	422人	499人
入院患者数	7,492人	7,742人	7,580人	8,270人
平均在院日数	34.4日	34.4日	29.8日	32.7日
平均病床稼働率	78.9%	84.3%	86.3%	96.9%
死亡退院率	0.9%	0.9%	2.0%	1.6%
剖検率	100.0%	50.0%	60.0%	75.0%

（3）特殊検査・手術症例等

サーモグラフィー、アトピー性皮膚炎の末梢血単核球のサイトカインの発現、蛍光抗体法による水疱性疾患の診断、筋皮弁による再建

（4）特殊専門外来

アトピー性皮膚炎と円形脱毛症

（5）高度先進医療・先端医療の導入

当科では、まだ高度先進医療は行っていないが、新たな高度先進医療の開発を進めている（2・(7)参照）。

※今後の課題と改善策

・遺伝子型（SNPs）までは及ばなくても現行の検査結果（サイトカイン・プロフィル、蛍光抗体所見など）を深く読み取りオーダーメイド治療を実施する。
・より速く、また廉価な治療法をもとめて、悪性腫瘍のクリティカル・パスを作成する。

4．国際交流について（平成９年度ー12年度）

（１）国際医療協力体制

人員を派遣せず

（２）留学（長期外国出張）

１）ミシガン大学（アメリカ合衆国），　平成９年４月～平成11年３月　１名
２）ハーバード大学（アメリカ合衆国），平成11年３月～平成13年１月　１名
３）蛋白質生物化学研究所（フランス），平成12年１月～　１名

（３）外国出張（国際学会活動など）

１）平成９年　第１回国際毛髪研究会　１人，オーストラリア
　　第19回世界皮膚科学会　２人，オーストラリア
２）平成10年　43rd Plastic Surgery Research Council　１人，アメリカ合衆国
　　毛髪ワークショップ　２人，ベルギー
　　国際研究皮膚科学会　３人，ドイツ
　　80th Annual Meeting of American Association of Oral and Mexillofacial Surgery　１人，アメリカ合衆国
　　円形脱毛症国際ワークショップ　１人，アメリカ合衆国
　　第２回国際毛髪科学研究会　１人，アメリカ合衆国
３）平成11年　第７回ヨーロッパ毛髪科学研究会　２人，イギリス
４）平成12年　第６回日中合同皮膚科学会学術会議　２人，中国

（４）外国人研究者の受け入れ状況

年　　度	平成９年度	平成10年度	平成11年度	平成12年度
目　　的				
受入人数				１名
出身国名				中　国
滞在期間				８月
費用負担				国　費

※今後の課題と改善策

・外国留学は続いているが、帰国してからの研究および日本における研究において海外との協力体制を構築する。

5．国内学会や研究会の開催（平成９年度ー12年度）

診療科で担当した地方学会・研究会、全国規模の学会・研究会

学会等の名称	開催期日	参加人員	発表形式	その他
大分地方会	9年12月	約50名	口頭	
〃	10年12月	〃	〃	
〃	11年12月	〃	〃	
九州真菌懇話会	11年12月	〃	〃	
九州基礎皮膚科研究会	11年11月	40名	〃	

※今後の課題と改善策

・学会発表をすべて論文にする。

・より質の高い学会発表を心掛ける。

・地方会レベルで、インターネットを利用した学会を試みる。

6．地域との関わり

診療科で担当した大分県内の研修会、研究会について

研修会等の名称	開催頻度	参加人員	発表形式	認定医資格継続適合の有無
大分市皮膚科研究会	月1回	10～40人	口頭発表	専門医単位票発行
大分アレルギー講習会	3年に1回 (平成10年3月)	50人	〃	〃

※今後の課題と改善策

・大分県内の皮膚科医との交流をさらに活発化する。

・皮膚の日に講演会を企画し、市民への啓蒙活動を行う。

7．診療科の特色

1）皮膚科医と形成外科医が教室員となっており、内科的視点と外科的視点の両方の観点から議論が可能で、長所・短所を互いに補うことができる。

2）いくつかの研究グループ間で議論できるため、これが研究面での視野を広げるのに役立っている。

8．将来展望

1）患者のQOLの要求度が高まるにつれて、さらに高度な医療レベルが求められるが、個々の構成員レベルで向上を目指して努力する。

2）臨床から問題点を見出し、それを基礎医学レベルで解決し、それをステップにしてまた臨床を考える、という過程を通じて臨床研究のレベルアップを図る。

3）上記1）、2）を行うことにより、大分医大の皮膚科の独自性を求める。